

自然教育園の動物目録の追録と 稀種動物の目撃記録 (8)

久 居 宣 夫*

Notes on Newly or Rarely Observed
Animal Species in the Institute
for Nature Study (8)

Nobuo Hisai*

は じ め に

今回は、1995年1月～1995年12月に新たに生息が確認されたり、目撃された種あるいは前報(久居, 1995)までに記録がもれた種について報告する。稀種については、「動植物目録」(国立科学博物館附属自然教育園, 1984)中で、r: “稀”, または(r): “古い記録はあるが、現在未確認の種”とされている全ての種を対象にしたが、これら以外にも最近特に個体数や目撃記録が著しく減少した一部の種も対象とした。

なお、学名および和名などは上記の目録に準拠した。また、カッコ内の日付は目撃あるいは捕獲した西暦年月日(日付のないものはふつうに見られることを示す)と目撃または捕獲地点と目撃者、捕獲者名を示し、氏名のない場合は著者の記録によるものを示す。

本報告をまとめるにあたって、情報を提供してくださった方々に感謝の意を表する次第である。

1. 追 録

Arthropoda 節足動物門

Insecta 昆虫綱

Parnassius glacialis Butler ウスバシロチョウ(鱗翅目 アゲハチョウ科)(1995.5.18 正門付近の路傍 萩原信介氏)

本種は路傍植物教材園(図1参照)にいた個体を萩原信介氏が目撃し(図2)、同氏によって捕獲され、インセクトリウムに放逐された。翌日、著者がインセクトリウムに訪れたときには、すでに死亡したのかインセクトリウム内には姿が見当たらず、観察できなかった。なお、同氏によればかなり新鮮な個体であったという。

本種の国内での分布は、北海道・東北・中部地方・中国山地・四国山地などであり、本州では低山地

*国立科学博物館附属自然教育園, Institute for Nature Study, National Science Museum

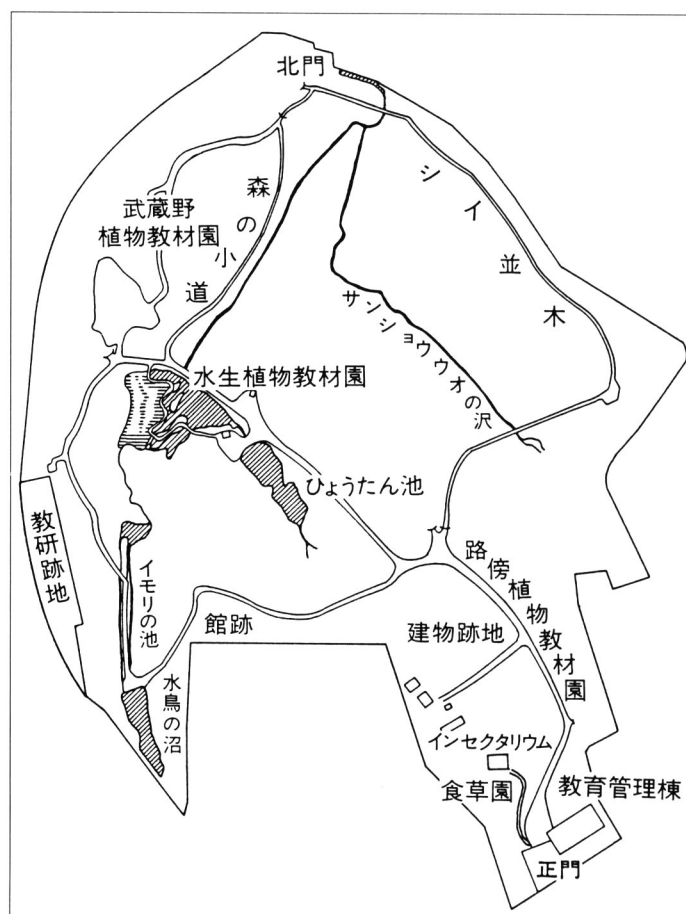


図1 自然教育園概略図

～山地に広く生息している（福田他, 1982）。東京では西郊の八王子市や青梅市などには現在も生息し、平地の畑地などでもよく見られる。しかし、都内では1980年代以降全く記録されておらず、都内では以下のような記録が散見されるにすぎない（西多摩昆虫同好会編, 1991）。

文京区：1949年以前に記録あり、その後の記録はなし（偶産種？）

千代田区：1950年代に記録あり、その後の記録はなし（偶産種）

杉並区：1970年代に記録あり、その後の記録はなし（偶産種）

このほか、本種は世田谷区でも1970年代前半に記録されているが、これも偶産種あるいは分布疑問種とされている（福田, 1988）。

本園には、食餌植物であるムラサキケマンおよびジロボウエンゴサクは豊富に生育しているが、過去の記録から推察すると本種が自然分布するとは考えられない。お

そらく、本個体は放蝶されたか、あるいは周辺地域で飼育されたものが逸出して飛来したのであろう。

2. 稀 種 の 記 録

(1) 昆 虫 類

Ceriagrion melanurum Selys キイトトンボ（蜻蛉目 イトトンボ科）(1995.8.9 水生植物教材園 矢野亮氏)

本種は夏季に1～2回程度、主として水生植物教材園で観察される。しかし、個体数は最近著しく減少し、今回の記録は上記の場所でわずか1個体目撃されたにすぎない。

なお、以前本種とともに観察されていた *Ceriagrion nipponicum* Asahina ベニイトトンボは1990年7月以後、全く記録されていない。

Cryptotympana facialis facialis Walker クマゼミ（半翅目 セミ科）(1995.8.11, 同8.16 矢野亮氏; 同8.12 大澤陽一郎氏; 同8.15 菅原十一氏; 同8.30)

上記の記録はいずれも食草園におけるもので、毎年夏季に数回鳴き声が聞かれる。



図2 ハルジオンで吸蜜するウスバシロチョウ
(萩原信介氏撮影)



図3 アカタテハ

Parachauliodes japonicus MacLachlan ヤマトクロスジヘビトンボ (脈翅目 ヘビトンボ科)
(1995.6.23 教育管理棟裏 菅原十一氏)

教育管理棟裏で死亡していた成虫を菅原十一氏が見つけたもので、著者によって本種であることが確認された。

本種の成虫は1988.5.19 にも建物跡地で捕獲された記録があり(久居, 1989)、また幼虫は1983.6.29 に北門付近の水路に生息しているのが確認されている(久居, 1987)。

Papilio helenus Linnaeus モンキアゲハ (鱗翅目 アゲハチョウ科) (1995.8.7 食草園 矢野亮氏;
同8.8 正門付近路傍 桑原香弥美氏)

本種は毎年、夏季に園内へ飛来する個体を1~2回目撃する。今回の記録は多分同一個体を目撃したものと考えられる。本種は、園内のカラスザンショウに産卵するのが観察されることもある(久居, 1989)が、本園での繁殖はまだ確認されていない。

Antigius attilia Bremer ミズイロオナガシジミ (鱗翅目 シジミチョウ科) (1995.6.6 インセクト
リウム付近 矢野亮氏)

本種も個体数や回数は少ないが、毎年のように目撃される。今回目撃された個体は比較的新鮮であり、1993.6.10 にもほぼ同じ場所で、羽化後間もない個体が観察されている(久居, 1994)。したがって、毎年わずかながらも、インセクトリウム付近に生育するコナラで繁殖していることは確実であろう。

Rapala arata Bremer トラフシジミ (鱗翅目 シジミチョウ科) (1995.6.30 インセクトリウム付
近 桑原香弥美氏)

本種も最近毎年のように目撃される。今回はインセクトリウム付近の草の葉上にいた羽化後間もない新鮮な個体を桑原香弥美氏が見つけ、著者によって本種であることが確認された。

Curetis acuta Moore ウラギンシジミ (鱗翅目 シジミチョウ科) (1995.4.6 建物跡地付近の路傍,
同8.30 食草園, 同10.20 建物跡地付近の路傍, 同10.31 インセクトリウム付近; 同4.2 建物跡地

菅原十一氏; 同4.12 路傍植物教材園 矢野亮氏; 同9.7 水生植物教材園 櫻井信夫氏)

本種は秋季の目撃例が多いが、今回は春に越冬後の個体が目撃されている。また、今回と同様1989年と1990年は夏季にも目撃されている(久居, 1990, 1991)ことから本園で繁殖していると考えられる。

Vanessa indica Herbst アカタテハ(鱗翅目 タテハチョウ科)(1995.10.25 食草園)

本種はこれまでも観察例はあるが、ここ10年ほど全く目撃記録がない。今回は比較的新鮮な個体が目撃された(図3)が、これまでの記録から推察すると、本園で発生したとは考えにくい。本種は都市内にも、比較的広い地域で1980年以降の記録があり、定着していると考えられている(西多摩昆虫同好会編, 1991)。また、“秋になると都市近郊の住宅地や公園、ときに市街地にもその姿を現す”(福田他, 1983)ことが知られているので、今回の観察例は、おそらく周辺地域からの飛来個体であろう。

本種の食餌植物は主としてイラクサ科のカラムシであり、そのほかラミー・ヤブマオ・アカソ・コアカソ・クサコアカソ・イラクサなどが知られている(福田他, 1983)。本園に生育するイラクサ科の植物は現在メヤブマオが多く、カラムシやヤブマオ・イラクサなどは少ない。そのため、本種が継続して繁殖する可能性は少ないものと考えられる。

Eophileurus chinensis Faldermann コカブトムシ(鞘翅目 コガネムシ科)(1995.11.1 現業舎付近 大澤陽一郎氏)

本種は、現業舎付近の倉庫の床にいた個体を大澤陽一郎氏が捕獲したもので、著者によって確認された。

本園では個体数が少なく、観察例はあまり多くない。成虫は6~7月(野村, 1963)あるいは4~10月(上野他, 1985)に出現するとされ、これまでの観察例も主として夏季である。しかし、本種は成虫で越冬し(岡田, 1969, 1970; 広沢・石井, 1993)、林(1995)によれば、成虫の寿命は長く、飼育個体では約3年生存した例があるという。なお、幼虫は朽木などの腐植物を摂食して成長するが、上記捕獲場所の倉庫は廃材置き場と隣接していることから、本個体もその朽木などで発生したのと考えられる。

(2) そ の 他

Gekko japonicus Duméril et Bibron ニホンヤモリ(トカゲ目 ヤモリ科)(1995.12.7~ 正門付近 奥津励氏)

本種は毎年1~2個体、教育管理棟内を中心に目撃されるが、今回の記録は正門付近の塀にかけられた看板の裏で越冬している集団個体が、奥津励氏によって見つけられたものである。

この越冬個体は現在も継続して観察されており、この記録については観察が終了したのち詳細に報告する予定である。

引 用 文 献

福田晴夫ほか8名. 1982. 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅰ). 277pp. 保育社.

———. 1983. 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅱ). 325pp. 保育社.

福田晴男. 1988. 移りゆく東京のチョウ. 「都市の昆虫誌」(長谷川仁編), 135-178. 思索社.

- 林長閑. 1995. コカブトムシ. インセクタリウム, 32(2):13.
- 広沢祥一・石井哲. 1993. コカブトムシ成虫を2月にヒノキの樹皮下より採集. 月刊むし, (271):40.
- 久居宣夫. 1987. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(1). 自然教育園報告, (18):41-44.
- . 1989. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(2). 自然教育園報告, (20):1-13.
- . 1990. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(3). 自然教育園報告, (21):11-21.
- . 1991. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(4). 自然教育園報告, (22):1-6.
- . 1994. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(6). 自然教育園報告, (25):29-33.
- . 1995. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(7). 自然教育園報告, (26):23-27.
- 国立科学博物館附属自然教育園. 1984. 国立科学博物館附属自然教育園動植物目録. 118pp.
- 野村鎮. 1963. コガネムシ科. 「原色昆虫大図鑑第2巻(甲虫篇)」, 123-138. 北隆館.
- 西多摩昆虫同好会編. 1991. 東京都の蝶. 200pp. けやき出版, 東京.
- 岡田俊典. 1969. スピード成長のコカブトムシ. インセクタリウム, 6(1):12-13.
- . 1970. コカブトムシの産卵について. インセクタリウム, 7(11):16.
- 上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝編著. 1985. 原色日本甲虫図鑑(Ⅱ). 514pp. 保育社.